
東方紅狼記

RED Volt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅狼記

【Nコード】

N1603BA

【作者名】

RED Volt

【あらすじ】

能力を生まれつき持った中学生、紅夜雅紀。

なぞの能力者との戦いで心臓麻痺をくらい、人生終了・・・と思いきや、目が覚めたらそこは平安時代！

しかも狼の妖怪になってしまう有様。

果たして紅夜は平穏な生活を送れるのだろうか？

エピローグ 心臓麻痺（前書き）

まともな小説を書くのは初めてです。
それでもgdgdは避けられないかと。
よろしくお願いします。

エピソード 心臓麻痺

突然心臓麻痺が俺を襲った。

「ガア………ッ！ハア………ッ！？」

目の前にいる男は、ノーモーションで俺の心臓を止めやがった。
顔はフードで隠れて見えないが、無表情のまま俺を見つめている。

「……………」

この男、一体なにもんだ？

まず、分かっているのは俺の『能力』が一切効いていない。

2つ目、俺の攻撃を知ってるかのように避ける。

3つ目、こいつも『能力者』であること。

それくらいしかわかってない。

しかもやたらと体術が強い。

おかげで片目を潰された。

怖い。

いままで俺が何回恐怖を感じたかなんて、指で数えられる程度だ。でも、今回は違う。

こいつは、人間じゃない。

れっきとした人間だろうけど、精神的な意味ではこいつはもう人間じゃない。

そもそも、俺の『能力』が効かないことがそう。

(く・・・・・・・・そ・・・・・・・・ツ)

徐々に近づく自分の死。

とんでもなく怖いし嫌だ。

でも、もう体が動かない。

本当に、こいつは何者なんだろうか？

残りがすのような気力をフルで使い、最期にこいつの『能力』を解析してやるか・・・・・・・・。

(間に・・・・・・・・あ、え・・・・・・・・)

残りゼロコンマ1秒。

おそらく間に合うのは不可能だろうな。

それでも、いい。

俺を殺せたんだし、まあこれから頑張れよってことで。

「う．．．．．」

「．．．．．」

なんでだろうな。

今、完璧にそうみえたんだがな。

こいつ、なんで悲しい顔してんだろうな？

第一部 森の奥で（前書き）

これからの設定上、こうなっていました。
あとからミスってしまうのはいやなんで。
それでははじまりです。

第一部 森の奥で

「ん・・・・・・・・」

目が覚めると、そこは天国でも冥界でも地獄でもなかった。
ましてや三途の川でもない。

そこは森。あたり一面は木で多い尽くされており、明らかに都会から離れている。

いや、そもそもここがどこなのか、見当がつかない。

「・・・・・・・・目が・・・・・・・・治ってる？」

潰されていたはずの片目が完治している。
どういうことだ？

「あの男・・・・・・・・いねえな。つーことはあの男がここまで運んだか・・・・・・・・いや、ここに寝かせとく理由がわからねえ。生き埋めにでもしてやればいいだけだよな」

一体何が目的だったんだか・・・・・・・・。

まあいい。今はこの状況の把握だ。

俺は地面に手をつけて立ち上がろうとする。

その時――――

ふにゅん

「は？」

何かやわらかい何か……いや、もさつとした何かが、俺の感覚を2つを辿ってやってきた。

ひとつは触れている感覚。

そしてもうひとつは視覚ではない。

痛覚だ。

「……………いってえ。なんだこ……………」

正体を見ようと下を向く。

それは、尻尾だった。

「・・・・・・・・」

尻尾がある。

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・ 正確的には、尻尾が生えている。

「はあああああああああ!?!」

それはどう見ても尻尾だ。

ほんとにそうなのだから間違いはない。
触れた感じもそれだしな。

「・・・・・・・・何故」

俺の持つ知識では、この尻尾は間違いなく狼のものだ。

と、いうことは・・・・・・・・

「・・・・・・・・もうひとつなきやいけねえもんがあるよな」

ひよい

ふさっ、ピクッ

獣耳もあった。

「・・・・・・・・まいりました」

まさかのここで丁寧語。

滅多に（というか絶対に）でない俺の丁寧語。
こりゃまいるしでちまうって・・・・・・・・。

「これ・・・・・・・・どうするか」

未元力場でも使って一時的に隠すとかすればいいが、なんか他にも俺には別の力場を持っているらしい。

解析したけどワケわからんもんだった。

しかもこいつのせいで俺が人間だかなんだかわからなくなるらしい。
こいつも・・・・・・・・隠すか。

「・・・・・・・・gさbだrtれ」

今のは単純に『能力』使用のための『コード』だ。

ほいほい使って他人を傷つけるわけにはいかねえしな。

ま、誰にも理解できない言語だからこうなった。

「・・・・・・・・うしっと。隠蔽完了。よし、尻尾も耳も隠れてる」

これで人に見られても怪しまれないよな。

「さて・・・情報集め、やるか」

何が出るんかわからねえが、まあおもしろそうだわ。

現にこんな意味不明な出来事に会ってるわけだしな・・・。
いいねえ、いつ振りだろうな。こんな高揚感味わったのはな・・・。
・。

第一部 森の奥で（後書き）

なにがしたかったんだって？

まあ、言えるのは設定上そうなってしまう、それくらいですよ。

次回は人とコンタクトします（多分）。

おたのしみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1603ba/>

東方紅狼記

2012年1月5日02時35分発行